

平成8年度吾峰会研究奨励金交付者論文紹介

美しい日本語を楽しみ、感動ある群読を創る

小澤 洋子 (いわき市立中央台北小学校)

小学校高学年の児童が「小さい声で発表する」「自分の考えを自由に表現できない」という実態に直面することが多く、その打開策としては「まず声を出すことの必要性」の認識が研究の動機である。姿勢、口型、舌・唇の体操の基本練習をベースに、早口ことば・名詩名文の鑑賞・暗唱へと段階を工夫し、発表の場を設けた。子供達が感想や意見を出し合う中で一文ずつのリレー読みから分読分担・発表隊形や場所の工夫へと発展させ、さまざまな群読を創り出した。国語の授業での詩や文学的文章の読解・鑑賞を土台として群読の年間計画を立て、声の大小・高低・遅速・強調・間のとり方等の表現技法を意識させ、動作化・伴奏楽器や小道具をとりこみダイナミックに表現する喜びと感動を体験させた。この実践と2年間の精選したビデオ(約2時間)には、教科書教材の他に20編ほどの開発教材(主に詩)の実践も提示した。

【キーワード】 群読の基礎、群読パフォーマンス、教科書教材、開発教材

I. はじめに

子供達は、日常会話や遊びの中では何にも規制されず喜々として腹から声を出し、手足指先を使い体全体で自己表現している。それが授業となると、制約が多いためか一変してしまうのである。例えば、「小さい声で話す」「音読・朗読では口ごもり、はっきりと聞こえない」「自分の考えを持ってない」「相手の考えを聞いても相づちを打てず、無表情である」「自ら発する表現力(語彙力・話し方…)が乏しい」「話し合いが活発にならない」等の教室風景が多々見受けられるのが現実である。

この大幅な落差は一体何なのだろうか。高学年ともなると音声表現をしなくなる傾向になり、それはあたかも発達段階に則しているような考えに出くわすことがあるが、そのことを受け入れることは、子供が本来持っているはずの表現意欲を引き出さないことになるのではないかと考える。高学年といえども音声言語による表現意欲は噴火寸前なのである。従って「授業の活性化」をはかり、「楽しく学び合い」「互いに高まり合う」ためには、豊かな日本語の言語感覚を磨き、音声言語による表現意欲を引き出し自信を持たせ意欲を喚起することが最善策である。それには、

◎ことば遊び ◎音読・朗読

◎群読(複数の読み手で創る朗読)の表現活動が挙げられる。ことば遊びや群読の表現活動を始めると、あっという間に手拍子が聞こえ、ひざでのリズム取り・大きな声・緊張した顔から笑顔への変化が見られるようになる。ことばの持つリズムと一人では味わえない複数による群読の響きが、一人一人を解放し、

楽しさと喜び・自信と発展性を生み出すのである。さらには、国語の授業のみならず、すべての教科の授業の活性化に連動し、自己表現力が高まり「学ぶ」ことの楽しさに発展していく。

II. 研究の実際

1. 楽しい群読の基礎を耕す

(1) 群読が引き出す子供の可能性と働き

群読とは、「一名のみを指名しての読みを『指名読み』とするならば、その対極に全員一斉に音読する『斉読』がある。『群読』は形態上は『斉読』に近いが、目的・機能の上からは鑑賞の深化と感動の表現に重点を置いたもので、分担を決め、集団で行う朗読である。具体的には、作品の構成をとらえ、一人で読むところ、みんなで読むところなどを決めるとともにそれぞれの個所の読み手を決めて読むようにする。」とある。(「国語教育指導用語辞典」教育出版)

群読は子供が本来持っている「声を出す喜び」と「集団で話し合い、学び合い、高まり合い、創造する能力」とを高める活動である。群読は子供のどのような働きがあるだろうか。

① 言語能力と音声による自己表現力が育ち、自信と意欲がわく

児童の声「口を大きく開けて、一音一音はしっかりと話し、大きな声が出るようになった。暗記力がついた。工夫した表現法を取るようになった。感情を出そうとしたり間の取り方を工夫したり、強調する語彙や文を意識して朗読するようになった。恥ずかしがらなくなった。

発表する自信がついた。」

- ② 美しい日本語に対する言語感覚・叙述を効果的に表現する感覚が育つ

児童の声「ピアノの音をいれると、本当にコオロギの音色のように聞こえたのですごい。声の大きさや役割を変えることで雰囲気さがらっと変わったのにはびっくりした。同じ読みでも、お坊さんのように手をあげたり文の切れ目を無くすと、寺のお坊さんになったような気がするようになった。こんなに楽しい早口ことばがあるなんて知らなかった。音楽やリズムを入れると楽しくなってくる。」

- ③ 自己の作品解釈を他と絡み合わせながら学び合い高まり合う

児童の声「『馬でかければ』の『はっしはっし』のA君の読みは、迫力があって聞いている人がドキッとします。木を人名にたとえたり、『すすきの海』と比喩表現を使っていておもしろいと言ったSさんの意見にはっとした。」

- ④ 聞く耳と聞く姿勢が育つ

児童の声「Y君が女優の〇〇さんのような朗読をしたのでじょうずだなあと思った。まねしたくなった。『あめ』(山田今次作)の全体で言う『たたく』のところは、一人一人スタカートで言って雨の強さが出た。分担しているけど、とぎれることはなかった。4組代表のI君は、声の大きさ・速さの変化等とても良かった。『石うすの歌』の群読は間違えずにでき、今までの練習より数段うまくなったとわたしは思った。だが、悪い点は、声が少し小さかったと思うので今度は大きくする。六年生の代表は、恥ずかしがらずに石うすを回していた。」

- ⑤ 国語の授業が活性化し、楽しい学級・学年・学校づくりができる。

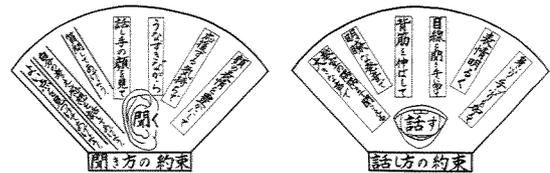
児童の声「話し合いで人の意見を聞き理解できる。自分の読み以外に人の読みを知ることができる。一人調べでみんなと違う表現や人物の気持ちをみつけて発表ができ、新たな解釈になっておもしろくなる時がある。分読を考えたときの話し合いでは、班の中の全員が意見を述べるので勉強になる。F君は、僕が気づかないことを言うってくれるのでためになる。N君がすげがさとわらじ

とはんてんを持ってきて身に付けて、筆で紙に書く動作を入れたので小林一茶の雰囲気が出てきてうれしくなった。『すつとびとびすけ』(谷川俊太郎)でアイデアを出し合った。動作をつけ、伴奏にちりとりを使い、お面も作りとても楽しい時間だった。これからの発表にもこういうことが生かせたらどんなにいいだろうと思う。他の学級もうまくなってきた。

焦点をしぼれば、以上の五つが群読の働きと可能性であるとする。

(2) 群読の基礎づくり

- ① 話し方・聞き方の約束……教室に常掲



- ② 発音・発声の基本練習(詳細は省略)

発音・発声について学習指導要領では全学年にわたって「はっきりした発音で・なまりや癖のない正しい発音で」話すように示されている。

○姿勢……脱力し、のどに力を入れないであごを引く

○正しい口形と舌・くちびるの体操

鏡を見てはぎれよく「イ・エ・ア・オ・ウ」

・口の体操

・舌の体操……レロレロ・

ラ・レ・リ・ル・

レ・ロ・ラ・ロ

・くちびるの体操……

オエオエオエ・

ウイウイア



- ③ 早口言葉と滑舌文練習

- ④ 名詩・名文の暗唱

2. 文学的文章の群読

【教科書教材】

「麦畑」で「作品世界を広く豊かにイメージする」群読を創る

- (1) 群読のねらいと教材の特徴

この作品は、4年で学習した「心情や様子の読み取り」中心の「一つの花」や「ごんぎつね」のように、「起・承・転・結」に沿って物語が展開されていない。これといった事件もなく、ハリネズミが他の小動物たちと道々交わす会話の繰り返しの中で「自然の美しさ、すばらしさの再認識」と「現代の文明社会の便利さへの警鐘」が表現されている。麦畑に着いてから

は、人間のまいた種が、土や太陽・雨などの自然の恩恵の中で成長し、麦の穂のそよぐ美しい合唱によって植物の生命の大切さが語られる。人間の営みが自然と直接つながっている麦畑である。「情景を読む」ことにより「自然の美しさ・自然の営み・それぞれの存在を互いに認め合いながら生きていることのすばらしさ」がこの作品の主題である。

子供達は、山がけずられたり空き缶が投げ捨てられたりしていることに批判的である。自然破壊に不安を抱いている。また、小鳥やセミの鳴き声・夕日・青空・草花・紅葉・満月等に「自然の美しさ」を感じず、「麦畑の美しさ・穂のそよぐ音・小川のせせらぎ・月夜の情景・自然の恵みの中で生きているすばらしさ」にまでは目と心が向かない。だからこそ、この作品を通して小動物たちの見方・考え方に感動し目が開き、自分の認識の見直しに迫られることであろう。

話の展開の工夫としては、次の点が特徴的である。

- ① 会話文が多い。(分担読みが楽しくできる。)
- ② 登場人物の動きがある。(劇化でのイメージ深化)
- ③ 余韻を残す文末が多い。(朗読の工夫ができる。)
- ④ 倒置・比喩表現が多い。(音声化による理解)
- ⑤ 麦畑を見ている場面のオノマトペ(群読で表現)
- ⑥ ナイチンゲールのさえずり・トラックの音(擬音)

以上の観点から、「会話文」と「麦畑を見ている場面」を中心に群読を取り入れた授業展開をした。

(2) 指導計画 (全9時間)

次	時	学習活動	留意点
一	2	各自の自然感と範読	出会いの感想・疑問
二	3	ハリネズミの考え・カワネズミと夜道の情景	読み取りノートへの表現の書き込み
三	3	麦の穂の合唱の群読の話し合い・台本・練習	コーラス・ソロ・交果音・分担読み
四	1	自然についてのまとめ	群読と「自然」感

(3) 楽しい群読学習の実際

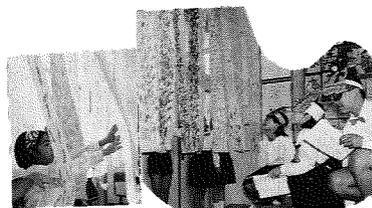
(会話文の台本は省略)

[麦の穂の合唱の場面から]

T すると、いく千いく万の声がさやさや歌いだしました。

行	コーラス1	コーラス2	コーラス3
1	サヤサヤサヤ		
2	サヤサヤサヤサヤ	サヤサヤサヤサヤ	
3	カサカサカサカサカサカサカサカサカサ		
4	ぼくらはぐん ぐんぐん		
5		ぐんぐんぐん	ぐんぐんぐん

6	おいしいパン になるために		
7			おいしいパンに なるために
8		育つよずん ずんずん	
9	ずんずんずんずん		
10		ずんずんずんずんずんずん	
11	大地の		
12		めぐみを すって	
13	ぼくらは小麦だ		
14	小麦だ	小麦だ	
15	小麦だ	小麦だ	小麦だ
16			これからのびて
17		これからのびて	
18	のびて		
19	のびて	のびて	のびて
20	みんなに食べて		
		もらうんだ	もらうんだ
21		みんなに食べてもらうんだ	
22	サーシャカシャカ		
23		シャリシャリ	
24		シャリシャリシャリシャリ	
25	シャリシャリシャリシャリシャリシャリシャリ		



【児童の声】

○シャリシャリ音
・サヤサヤ音が麦のこすれ合う音に合っていて、素敵だ。ぐぐぐぐ伸びたいように感じた。

3. 詩の群読

【開発教材】

「教室はまちがうところだ」で「個性が育ち、素晴らしい学級をつくる」群読パフォーマンス

(1) 群読のねらいと教材の特徴

4月。新しい希望と期待を胸に子供達も教師も教室に向かう。組替えになった場合は特に朝がにぎやかだ。元気の良いあいさつが次々と交わされる。大きな声もあればひそひそ話す声もある。授業もこんなににぎやかだったらしいのに。「授業は、みんなで考えを出し合って新しいを発見していく楽しい時間なのですよ。」と説明してもあまり効果がない。「考えを出す」ことに抵抗を感じている子供が多いため、授業が生き生きと進まないのだと思う。

詩「教室はまちがうところだ」は、題名そのものが主題になっていて非常に分かりやすい。発表できない

でいる子供の心理をきちっととらえ、「間違ふことは悪いこと」ととらえがちな子供の考えを見事に覆し、子供達を安心させ励まし、意欲を喚起させてくれる。4月の学級づくりの活動の中にこの詩を取り上げ、共通の話題にし、一年間の学級の骨格を確立する材料とする。群読により感動的に表現していけば、自然にこの詩のように行動する子供に成長し、教室が活性化し、子供の主体性や積極性を伸ばすことになると思う。

(2) 指導計画 (全3時間)

時	学習活動	留意点	備考
1	教材の微音読	好きな文を指摘できる。	国語
2	分読法の話し合い	ソロ・コーラス等の分担	学活
3	群読練習	自分の役割の表現の工夫	学活

教材の各連に番号をつけ、発表の便利をはかった。微音読と朗読の練習後、自分の好きな文や連に「サイドラインを引き、その理由を余白に書く」活動をし、発表内容を群読脚本に生かした。

(3) アイディアを生かす群読パフォーマンスの実際
ソ (ソロ), ア (アンサンブル), コ (コーラス)

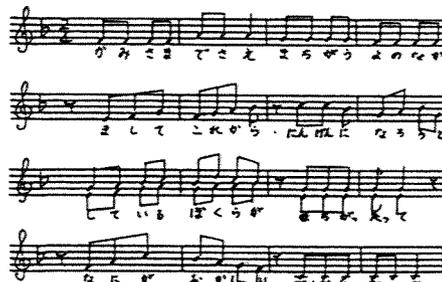
連	行	詩	分読法	表現方法・演出
一	1	教室はまちがうところ だ・まきたしんじ	ソ	・明るく
	2	教室はまちがうところ だ	ソアコ	・キーワードを 3回繰り返す。
	3	みんなどしどし手を挙 げて	ソ コ	・コが一部を。
	4	間違った意見を言おう じゃないか	ア	
二	1	間違った答えを 言おうじゃないか	ソ	・コが「どしど しどしどしどし どし」と唱える。
	2	まちがうことを おそれちゃいけない	ソ	・打楽器で二拍 の間を取る。
	3	間違った者を ワラっちゃいけない	ア	
	4	間違った意見を 間違った答えを	ソ	
	5	ああじゃないか こうじゃないかと	ア	・両方の手の平 と甲を交互にか えず動作
	6	みんなで出し合い 言い合う中で	ソ	・ウッドブロッ クの高低音で諧 瘻味を出す。

(「教室でよみたい詩12か月」民衆社 参照)

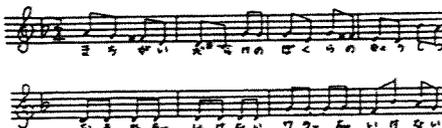
- 以下は、十六連までの主な表現方法・演出である。
- ①五連・十二連・十五連に児童即興の節づけをした。
 - ②七連・八連で「赤い顔と白い顔」のお面を使った。
 - ③分担ごとにまとまり、全体として円陣の隊形にした。
 - ④動作化をふんだんに取り入れた。

児童即興節づけ例

五連



十二連



Ⅲ. おわりに

授業参観日に圧倒的に多数の子供が「群読の発表」を希望した理由は、「声が小さかったけれども、今ではもう大きな声になったところを観てもらいたい。」「国語や算数は得意な人は発表できるけれども、『群読』だと、群読脚本8つの作品一つ一つに全員の役割分担があるのでみんなが活躍できる。」であった。一人一人が表現する自信と意欲を持ち、充実感を味わい積極性が表出てきたことが確認できる。今後も「学ぶ」ことの楽しさとすばらしさが実感できる授業を目指し精進したい。研究各位のご指導、ご鞭撻をお願いしたい。

※参考文献

「子供が創る『音読・朗読』の学習」明治図書 他多数